がんセンターで歯科のアイデンティティーを持つ

国立がん研究センター中央病院歯科医長 上野尚雄氏に聞く

がん患者さんの痛みを口腔から支える思い。その根底にあるのは…

新春一月号でご紹介させていただくのは、国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院の上野尚雄氏。上野氏は、わが国のがん専門病院・研究機関の基幹病院といえる同センターで歯科医長として勤務。化学療法や放射線療法など、さまざまなガン治療中の副作用として生じる口腔粘膜炎や感染症といった口腔合併症で苦しむ患者さんの痛み、不安などを和らげ、食事が美味しくとれ、会話もはずみ、快く過ごせるようにと願い、今日も診療に当たり患者さんを口腔から支えている。上野氏が歯科学生時代の授業では、がん治療と周術期、口腔ケアなどは今のように取り上げられておらず、さらに専門は口腔外科。では、なぜ上野氏はがん患者さんを口腔から支えよう、守ろうと決心したのか。そこには、穏やかな口調の中にも固い決意と信念が込められていた。インタビューアは協会広報・ホームページ部の早坂美都部員。

プロフィール

上野尚雄（うえの・たかお）／

平成９年：北海道大学歯学部卒業、北海道大学第一口腔外科に 入局。平成15年：北海道大学大学院歯学研究科博士課程を卒業。平成16年：静岡県立静岡がんセンター 歯科口腔外科に入局。平成19年：静岡県立静岡がんセンター歯科口腔外科副医長に就任。平成20年：国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院歯科医員に。平成24年：現職に就任し現在に至る。

大田洋二郎先生との出会い 私が目指す方向は「これだ」

―早坂美都部員　昨年十月十五日に当協会主催の「周術期研究会」で上野先生のお話を伺い、がん患者さんの周術期口腔ケアの有用性を再認識しました。まず、どのようなきっかけで歯科医師を目指し、がん患者さんの周術期口腔ケアに携わるようになられたのでしょうか。

◆上野尚雄氏　実家は医療関係ではなかったのですが「医療従事者として手に職をつけよう」と歯科医師を志しました。北海道育ちで、北海道大学で歯学部から大学院までお世話になり、学位取得後も北大病院の口腔外科に勤務していました。当時、がん患者さんへの口腔サポートにはほとんど携わっておらず、造血幹細胞移植を受ける患者さんの抜歯を行う程度の関わりでした。今のような形でがん患者さんに歯科医師として深く関わるようになったのは、静岡県立静岡がんセンターにレジデントとして赴任することになってからです。

スキルアップのため 静岡がんセンターへ

静岡がんセンターには、当初は口腔外科医としてのスキルアップを図るつもりで応募しました。しかし、そこで目にしたのは、多くのがんの患者さんが副作用と闘い、不安を抱えながら、それを乗り越えようと、さまざまな職種の医療者とともに一丸となって治療を続けられている姿でした。そして、そのような闘いの中で、私の想像を超えるような頻度と重症度で、口腔のトラブルがあることを初めて知りました。恥かしながら、静岡がんセンターに赴任するまでは、ここまでがん患者さんが口腔の問題で困っている、ということを認識していなかったのです。静岡がんセンターでは、就学前のお子さんも小児がんと闘っていました。小さい子どもまで、化学療法や放射線療法の副作用で口腔内は重い粘膜炎で血がにじみ、食事も、声を出すことも大変な状態になり、「口を何とかしてください」と歯科に助けを求めてきていました。このことに大きな衝撃を受けるとともに、「歯科としてこの子どもたちに対して何かできることはないか」とも、強く感じました。

―その後、具体的にはどのような治療を始められたのですか。

◆上野氏　静岡がんセンターの口腔外科部長であった大田洋二郎先生は、すでに同センターで「がん治療に口腔ケアを取り入れる」ことで、がん患者さんの治療上の実績やエビデンスを積み上げていました。がん患者さんの口腔ケア、歯科医師としてがん治療の支援として何ができるかなど、さまざまなことを指導していただいている中で、私自身が進む方向は「これだ」と感じました。大田先生にお願いし、レジデント終了後もがんセンターに残らせていただき、がん患者さんへの歯科支持療法を勉強させていただくことにしました。

上野氏は、がんセンターでの診療と患者さんへの対応を終え、インタビュー会場に駆けつけてくれた

患者さんとともに「闘うための道標」を共有する

―大田先生とはどのような取り組みを。

◆上野氏　「がん治療の副作用はゼロにすることは難しい。しかし副作用だからしょうがない、とせずに少しでも症状を軽くすることを考えよう」というスタンスで、リスク管理や症状緩和としての口腔ケアに取り組みました。副作用のすべては治せなくても、今よりも楽な状態になり、すっきりとした快適な口腔に少しでも近づけようと努めることは、患者さんにとって非常に大事です。

患者さんの不安軽減にも光を

また、患者さんの不安軽減にも目を向けることを教わりました。口腔に副作用が出た時、「何をすればいいのか、この口の痛みはいつまで続くのか」などの情報がないことは、とても不安なのです。患者さんに口腔粘膜炎などの回復への見通しを説明し、行うべきこととして口腔内をきれいにする方法を指導するだけで、それは患者さんの不安を軽減します。患者さんにとってその情報は「がんと闘うための武器」であり、適切な情報を患者さんに提供することは、とても大切な支援なのです。

口腔ケアの担い手たる歯科衛生士さんの励みにもなる環境を

早坂美都部員

―実は、私の患者さんで八年前に膀胱がんを発症し、四回入退院した方がいらっしゃいます。その間、私の診療所に通院していましたが、口腔ケアを行っていたため、やはり治りが早かったです。上野先生のご講演の中で、膀胱がん患者さんの口腔粘膜炎発症率は高頻度であるとの説明でしたが、その患者さんは、一度も口腔粘膜炎にはなりませんでした。

◆上野氏　がん治療中は口腔が劇的に悪化しやすく、また口腔ケアの効果も劇的に現れることがあり、わかりやすいという側面はあると思います。また以前は、がん治療における口腔ケアの有効性は、臨床現場ではそれなりに認識されてはいても、エビデンスはまだまだ低いと思われていました。しかし、今では無作為化比較試験といったエビデンスレベルの高い研究スタイルでも、その有効性を支持する報告が出てきています。これからがんの化学療法などを受ける患者さんがみえたら、その病院に連絡し、口腔ケアを進めてください。

周術期口腔管理の保険収載と大田先生の急逝

―大田先生との取り組みについてもう少し。

◆上野氏　大田先生は、がん治療の支援としての歯科の介入を診療報酬に反映させることに尽力されました。あと十年はかかると思われていましたが、周術期口腔管理という形で、異例の速さで保険収載されました。しかし、がん患者さんが歯科の支援を必要としているのは、周術期口腔管理でカバーするがん治療中だけではないのです。がん治療のあと、がんは治ったものの治療の影響が口腔にも残り、食事や会話に支障をきたしているような方が多数おられるにもかかわらず、地元の歯科ではなかなか対応してもらえない…。そのような患者さんもたくさんおられるのです。大田先生は「がん治療の前後だけでなく、さらにその先、人生の最後まで歯科が口腔の問題をどうサポートするのかも非常に大事であり、その実現には地域の歯科の先生方の協力がぜひとも必要」と話していました。がんとの旅路の最終章まで歯科が責任を持って口腔をサポートする体制作りに尽力されておられました。

歯科衛生士と周術期の口腔ケア

―周術期と口腔ケアの関連で、今後どのような展開を望まれますか。

◆上野氏　がん口腔ケアの実際の担い手は、やはり歯科衛生士です。現在の管理料だけではなく、衛生士が実際に口腔内を保清・保湿する毎回の手技そのものにも何らかの診療報酬上の配慮、インセンティブがつけば嬉しいです。点数の多寡ではなく、その点数があること、環境を整えること自体が大切であり、頑張ってくれている歯科衛生士さんへの励みにもなると思います。高度な先進医療と、われわれのようなプライマリー・ケアは医療の両輪であり、より良い医療はその適切なバランスにより成り立つものだと思います。

国立がん研究センター外観

大田先生の言葉を胸に口腔ケアを

しかし二〇一三年六月二十九日、大田先生は出張先のドイツで、突然、客死されました。急な出来事で、私たちは皆、ひどい空虚感に襲われました。しかし、大田先生が私たちに常々「歯科のアイデンティティーを持ち、われわれ歯科にしかできない医療をがん治療の現場で提供していこう」と語ってくれたことをかみしめ、「大田先生の思いをここで消してはいけない」という気概を胸に、がん患者さんたちの口腔ケアに取り組んでいます。

―昨年十月の周術期研究会の時、そして今回のインタビューを通じて先生のお話を伺い、私も歯科医師としての自信を改めて確かめることができました。本日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

（了）